

---

# 最弱勇者レベル100

チチルチルチル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最弱勇者レベル100

### 【Nコード】

N9871Y

### 【作者名】

チチルチルチル

### 【あらすじ】

アルカリス学園。世界で唯一の、魔王を倒し世界に平和をもたらす勇者を育成する為に作られた学校である。

そんなアルカリス学園に入学しようとした少年、トウヤは街中で一人の少女と出会う。

「あなた　魔王でしょ？」

元魔王の少年と魔王にしか攻撃の当たらない少女。その他が送る勇

者育成学園ストーリー……のつもりです。

## プロローグ

その日も、何も変わらない日だった。

いつものようにダラダラと過ごし、いつものように妹を可愛がり、いつものように何もしない。

それが少年にとっての日常であり、この世界のあるべき姿だった。良く言えば平穩、悪く言えば何も無い。

退屈で怠惰で刺激の無い、楽しい日々だけがそこにはあった。

ある……はずだった。

辺り一面を血が覆い尽くす。もともと赤かったはずの絨毯も、血で更に赤く黒く染み付いている。

絨毯の上には原型もわからないほどに切り刻まれた何かの肉塊が積み重なっている。

古い建物独特の湿っぽい匂いや、それを誤魔化す為の香水などの匂いは既になく、鼻にツンと来る血の匂いのみが充満していた。

数時間前までは古いながらも極普通の建物だった。そこにいた者は皆笑い合い、冗談も交えながら談笑していたはずだ。

そんな皆が今は、どうして　！

「いい加減諦めたらどうですか？」

少年の意識が強引に現実へと引き戻された。

今いるのはある部屋の中心。辺りを血や肉塊、そして一人の男と

それに付き従う者達に囲まれている。各々の手には剣や斧など、誰かを殺傷する為の武器が。

男は年齢30代ほどで、黒を基調とした神官のような儀礼服を身に纏っている。鎧ばかりの中で一人だけそんな格好をしているものだから、自分が指揮官だと言ってるようなものだ。

対する少年は一人。

武器である剣は真ん中からポックリと折れ、とても戦える状態では無い。その腰には鞘に収まったままの刀があるが、今この状況では使えない。

絶体絶命のピンチ。常人ならば現状に絶望しガムシヤラに足掻くか、諦めてその先に待つ未来を受け入れるか。どちらかを選ぶかもしれない。

だが、少年には絶対に生き延びなければならない理由がある。世界の王として、一人の兄として。

今この命を散らすわけにはいかない。

「貴方ともあろう方がこの様。既に貴方の時代は終わったのですよ？」

「……ハッ！ とか何とか言いながら俺はまだピンピンしてるぜ？ 多対一なのに余裕な俺の時代が終わるわけ無いだろ」

嘘だ。

刀は既に折れ、その体には致命傷は無いものの小さな傷が無数に刻まれている。体力も限界に近く立っているのがやっと。魔力も底を尽き最後の足掻きすら出来ないのが現状だ。

それがわからない男ではなく、少年もそれをわかっている。

「……見苦しいですね。いい加減、終わりにしましょうか」

男が右手を天へと向けるようにあげる。周りにいたその部下達は一斉に武器を構え、いつでも少年を襲える体制になる。

少年の体を冷や汗がスーツと流れ落ちて行く。

こんな所で死ぬわけにはいかない。何としてもここから逃げ出さなくちゃいけない。決して、生きる事を諦めたわけでは無い。諦めたわけでは無い、のだが……。

「……仮にこのまま俺を殺せたとしても、王族を討つたお前に従う者はいないぞ」

自分の死後を考えてしまう。

その言葉は男に対する最後の武器、最後の抵抗だったのだが、それはつまり自分の死を半ば受け入れてる事に他ならなかった。

ただ、それでもこの武器は強力な威力を秘めている。

王である少年を討ち、全く関係の無い者が王を名乗れば当然ながらそれに付き従う者達から反感を買う。最悪、そういった者達に今度は自分がやられてしまうかもしれない。

したり顔をする少年だったが、男は表情を一切変える気配がなかった。

……いや、微妙ながらその顔に表情が浮かんでいた。それは、どうしようと言った焦りではなく、気づかなかった事への戸惑いでもなく、苦し紛れの怒りでもなく、

少年に対する嘲りだった。

「……何か勘違いをなさっているようですね。私は貴方を殺して王になるうとしてるわけではありませんよ」

「……なに？」

カツカツと、靴の音を鳴らしながら男は少年の方へと歩く。自分にとって最後の武器を使つたにも関わらず、余裕な態度を崩さない男に懐疑的な視線を向ける。

「なぜなら、王になるのは別の方。貴方と同じ、王族の血を受け継ぐ方なのですから」

「……っ！！」

貴様、まさか……！？」

「ようやくご理解いただけましたか」

そこでニツコリと微笑んだ。

少年にとってそれは死を呼ぶ死神よりもずっと恐ろしい、自分の生死などどうでもよくなるようなものだった。

先ほどに比べ尋常じゃ無いほどの汗が流れ落ちていく。一滴、また一滴と。

滴り落ちる音が男の足音と重なり、感覚を狂わせて行く。視界がボヤけ、平衡感覚もいかれて足がふらついている。カラン、と握っていたはずの折れた剣が落ちる音が聞こえる。思考も定まらず、自分が今何を考えているのかさえわからない。

そんな少年の前に、男が立つ。

その手には細身の剣が握られており、切っ先を少年の胸　心臓へと合わせる。

「貴方亡き後、空位となった魔王の座を継ぐのは貴方の妹君であらせられるリイーン様です」

「さようなら」とニコリ笑い、肉眼では捉えられないほどの神速の剣がハクトウリーリヤの胸を貫いた。

おびただしい量の血が噴水のように周囲に溢れ、血で汚れた床を更に血で汚して行く。

最初は感じた痛みも段々と失われて行き、熱さと寒さが一緒になって体を襲う。

そして、力が入らなくなり、スルリと零れ落ちる様に倒れ伏した。

こうして、魔王の少年　ハクトウリーリヤは死んだ。



## 第一話

世界は無数に存在する。

魔法のある世界、科学の発達した世界、気を操る世界。世界の数だけ様々な世界が存在している。

それは当然、魔王の存在する世界もあるという事だ。世界中にその悪行と悪名を轟かせ、魔物を配下におき、力の限り暴れまくる魔王の王。

ただ、そんな魔王も一人の人間、勇者と呼ばれる存在に打ち倒される。そう言った世界も無数にある。

だが、そんなのはお伽噺になっってしまう世界も少なく無い。

魔王の圧倒的な力の前に屈し、抵抗する力を失った世界。勇者となるべき存在が誕生しなかった世界。

そんな世界に住まう人々は、いつ来るかもしれない死という恐怖に震えていかなければならないのか？

いや、違う。

そういった世界を救う方法はある。

魔王を倒す勇者がいない。なら解決方法は唯一つ。

別の世界から勇者を連れてくればいい。

アルカリス学園。

そこは無数にある世界の中で始まりの世界にある学校。

別名、勇者育成高。

そこでは未来の勇者達が集っていた。

「何だこらあ！」

「やんのか？ ああん！？」

二人の男が互いにその胸倉を掴みあい、低い声を響かせながら睨み合っていた。

場所は道の真ん中。ハッキリ言って迷惑極まり無いのだが、周囲にいる人の殆どは二人の様子が怖くて遠巻きに眺めているだけだった。「こつちには絡むなよー！」という心の声を表情に出しながら、素通りして行く。

一部、「やれやれー！」などと囁し立てる者はいるが、大体は無関心を装っている。

「てめえ如きが調子にのんなよな！？」

「てめえこそ、強いのは口先だけか？」

「何だと！？」

「元気な事で……人の迷惑とか考えろよ……」

トウヤもその例には漏れていなかった。

チラリとその様子を一瞥すると、深いため息と共にポツリと独り言を呟いた。

ただ一点、他の人達と違うのはこの二人が怖いんじゃない、ただ単にめんどくさいだけだ。めんどくさい事には関わらない。それがトウヤのモットーである。

それに、今はそれどころでは無い。行かなければいけない所があり、まだ時間には少し余裕があるのだが面倒ごとのせいで遅刻するわけにはいかない。

だからスルーするんだ！

誰かに言うわけでもないのに、そう言い訳して男達の横を素通りしようとした。その時

「あんたら！ いい加減にきなさい！」

怒声が響いた。

毅然としたその声にトウヤが、男達が、周囲にいた人達が一齐にそちらを向く。

そこにいたのは一人の少女。

両腕を組み、仁王立ちをしながら男達を睨めつけている。状況的に見て、揉めているこの二人を見て止めに入ったのだろう。

だが、体格のいい男二人に比べると少女は小柄すぎる。女性にしては背が少し高いが、その程度である。スラリと伸びた手足にキュツと引き締まったウエストなど、女性が目指す見事の一言に尽きる美しいスタイルなのだが。いかんせん、こういった荒事には不適応な感じが否めない。

実際、周囲の人々は少女に対して「やめとけ！」といった視線を

向ける。この少女にどうにかできる問題では無いと判断したのだらう。

男達も同じで、不機嫌そうに少女へと標的を変える。……さつきまで揉めていたのに友人同士のように、通せんぼするように前に立つ。

(あの女……)

何か思うところがあるのか、トウヤはその足を止めてその様子を遠巻きに眺め始めた。

その少女は一言で済ますなら美少女の類に入る。

完成されたスタイルに負けず劣らず。キリツと整えられたその容姿は、可愛いと言うよりは綺麗と呼ぶのが相応しい。特に人々の視線を集めてしまうのはその瞳。青く透き通ったそれは、世界一綺麗とされる海よりもずっと深く、透明。少し釣り上がった感じが彼女の強気な姿勢、美しい強さをより一層引き立てていた。

だが、男達にはそんなことはどうでもいいこと。

ただでさえ互いにムカついていると言うのに、そこに偉そうな口調の女が現れた。

二人の怒りは完全に少女へと向けられていた。

「何だてめえ。アルカリス学園のエースとなる俺に逆らうのか？」

顔を数センチという所まで近づけ、ガンを飛ばすその姿はもはや完全にチンピラである。

だが、少女はそれに何の反応も示さなかった。怯えるでもなく、焦るのでもなく、怒るのでもなく、感情を無くしたかのように反応をしない。

まるで取るに足りない相手と接してるかのように。

「へえ……あのアルカリス学園に入るんだ。やめとけば？ あんたらじゃ魔王どころかそこら辺の魔獣に食われるのがオチよ」

「な……っ！ て、てめえ！」

男達の顔が茹でダコのように真っ赤になっていく。そのまま湯気が立ち込め、ピーという音が鳴りそうだ。

完全に頭に血が昇ってるのは誰の目から見ても明らかだった。

周囲の人々は「何挑発してんだ！ 今すぐ謝れ！」と、顔を青くしながらその表情に書いてある。

だが、トウヤだけは違った。

トウヤはしっかりと感じている。少女から溢れ出す、圧倒的なまでの魔力を。

それは男達だけでなく、その周囲にいる人々全ての魔力を足しても余裕のある、まさに勇者なりえる強大な力。

それを感じ取ることでできない男達は所詮三流。少女の敵にすらなり得ない。

だからトウヤは少女の言動よりも、その魔力を、流れをジッと観察している。

「殺す！ 今すぐぶっ殺す！」

男達は何かを口早に唱え始める。

魔法を使うための準備、言葉にすることで描く魔方陣、呪詛。

それは少女を攻撃することに他ならない。

それに気づいた人々は巻き添えを喰らわない様に慌てて逃げ始める。周囲が一気に騒がしくなり、トウヤに何人かぶつかって来たほ

どだ。  
それでも、視線を一度も少女から逸らさなかった。  
だからこそ気づいた。

少女が既に魔法を完成させてる事に。

「先に言っておくわ」

少女は右手の掌を空へ向け、自分の胸の前まで持ってくる。  
手の上にあつたのは一つの球体。いや、光とも言つべきか。直  
径30センチほどのそれは風船の様にプカプカと浮いている。

「今からする私の魔法を 絶対に避けなさい」

男達は「アア!？」といった視線を少女に向けるが、その顔はみ  
るみる内に青くなっていく。

「バカが、今頃気づいたか」と、トウヤは心の中で深くため息を  
ついた。

さすがの男達も少女が魔法に込めた魔力の大きさに気づいた様だ。  
慌てて逃げ始めるが、もう遅い。少女の魔法はとつくに完成して  
いる。

「『閃光』」

男達に向けて光の球体ごと手をかざすと、光は一気に膨張した。直径1メートルほどに膨れ上がり、その名の通り閃光の早さで一直線に男達へと向かい、

一気にかき消された。

「!?!」

少女の目が見開かれる。よほど驚いたのだろう、数秒の間そのまま固まっていた。

そして、自分の正面に立つ、魔法を打ち消した乱入者を睨みつける。

「全く……俺一般人なのに」

そこには、深くため息をついた乱入者の少年　トウヤがいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9871y/>

---

最弱勇者レベル100

2011年12月3日23時50分発行